九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 現代不換通貨の構造とその価値

高木，暢哉

https://doi.org/10.15017/4403442

出版情報：經濟學研究. 33 (5/6), pp.63-82, 1968-02-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

# 現代不換通貨の構造とその価値

高木暢哉

一、はしがき
二、二種の通貨の二様の価値―矛盾
三、矛盾の解決―通貨構造と物価構造
四、矛盾の発展―現代のインフレーション
五、おわりに

## 一　はしがき

ドル通貨はなぜに不安になってきたのであろうか。また金はなぜに流出するように変わってきたのであろうか。それには、もちろんさまざまの理由があげられる。貿易収支の黒字の減少ということは、確かに理由の一つである。国際的な資本の移動ということも、原因の一つであったことに、まちがいない。ところで貿易収支の黒字は、なぜに減少するように変わってきたのであろうか。また国際的短期資金がアメリカから流出したりするようになるのは、なぜであろうか。これには、ドル通貨の価値の現実の低下、その表わす金量の減少、または将来においてのそういう低下・減少への予想のごときが、関係していると思われることについては、前号の拙論で述べてきた。

ドル通貨の価値が低下し、したがって一般的物価の水準が高騰しつつあるときには、輸出はしだいに振るわなくな

り、輸入はしだいに増加してゆくことになるのは、当然であろう。つまり貿易収支の黒字は、しだいに減少してゆくことになるであろう。またドル通貨の価値が現実に低下し、または将来も低下すると予測されるときには、諸国は、ドル債権の形で貨幣資本を保有するよりも、これを金に換えて持ちたいと望むであろうから、金の流出が生じることになる。同様の理由から国際的短資の流出も起こることになるわけである。

原因をドル通貨の価値の低下ということ、このこと一つに絞って解釈することは、もちろん一面的にすぎるのである。ドル通貨の価値は、なぜに下落するようになってきたかと理由をたずねてゆけば、原因はさまざまに錯綜して、一言ではいい切れない交互関係や基底的原因が見出されうるわけである。しかしそれはともかくとして、さしあたり考察をどこかの次元でおしとどめ、そこでいちおう問題を切りとって考えてみようとするときには、ドル通貨の価値の下落ということが、もう少し細かくいって不換のドル通貨の表わす金量の減少ということが、中心的論題の一つとなって浮かび上ってくることだけは、確かである。この問題が、われわれの考察にとっての一つのポイントを提出する。

しかし実はこのことから、新しい問題が生じる。それは、いうところのドル通貨とは、具体的にいって、なにを指すのかということである。自明のように、われわれはドル通貨という言葉を用いるが、そのドル通貨とはなにかということが、先んじて確定されていなければならない。すくなくとも、ドル通貨の価値ということが問題とされる場合におけるドル通貨という概念についてのことである。当然のように、それを単に銀行券とだけ考えて論じるこれまでの述べ方に、わたしは実は疑問をもつ。ドル通貨ばかりのことではない。わが国の円通貨が問題とされる場合にも、同じことがいえる。わが国のインフレーションが問題とされるにあたり、自明のように、通貨を単に銀行券とおいて考えを進めてゆくのが、通例のようだ。しかしそういう考えの進め方は、日本の現実についてみても、そぐわない。いわんやアメリ

カの場合は、いっそうに。こんにち支配的に流通手段となって機能している預金通貨のことが考えに入れられていないからである。預金通貨のことまでも考えようとするならば、インフレーション論はもう少し違った仕方で展開されてきたことであろう。したがって正しく充分な成果を収めることができたであろう。しかしそれはともかくとして、これまでのような不換銀行券だけを中心においた考察の仕方には、一歩、工夫の必要があるように思う。

## 二　二種の通貨の二様の価値—矛盾

われわれは銀行券に預金通貨を加えて、現代の不換銀行通貨の価値について考察を行なうべきであると思う。ドル通貨とか円通貨などという場合には、ドルや円での銀行券とか預金通貨を思い浮かべることにすればよい。これらのほかに通貨としては、小額の補助鋳貨のごときがあるが、総流通において占める役割はとるに足りない。いまは捨象して考察を進めてゆくことができる。アメリカにおいては、小口の取引を除くと、資本の流通はいうまでもなく、所得の流通においても、預金通貨がその主な流通手段となって機能している。この国の総流通額の八、九割のものは、預金通貨によって処理されているという。わが国においても、預金通貨の総流通において占める量の比率は、アメリカほどではないにしても、やはり大きい。それはますます増大してゆく傾向にある。

もっとも、量的比率の点でいえば、そういうことになろうが、二者の質的構成の意義からいえば、銀行券が依然として第一次の基礎的流通手段であるということの事実については、変わってはいない。銀行券は預金通貨にとり支払手段で、現金の地位に立つからである。預金通貨の内実は銀行が負う預金債務であって、これに結びついては、帳簿上の振替移転とか手形交換などにおける現金流通阻止の機構が働く。それでもなお現金による支払いを除くことができぬ流通

する銀行債務＝預金通貨にたいしては、銀行券が最終的な処理の手段となって出動しなければならない。市中での手形交換残高の決済のためには、中央銀行におかれる当座預金勘定が使用され、すなわちそれは預金通貨の形式をとるのであり、しかもその実際の内実は銀行券の潜在的発行とみなされてよい。潜在的発券を内実として流通する預金勘定＝預金通貨とみれるのである。それでもって、手形の最終的処理が行なわれる。

このようにして預金通貨は、それにとっての支払手段である銀行券の価値を代表し、銀行券に代わり、購買手段または支払手段として広く社会に流通することができる。量的には銀行券を圧倒して総流通の大半を占めるにしても、それが成り立つ根拠、機能上の基礎としては、銀行券を歴史的にも論理的にもその前提としてもつ。金貨幣が国内では流通しなくなった現状では、銀行券こそが第一次の国内での流通手段であり、預金通貨はその基礎の上に立ち、銀行券からその価値が導かれ派生する第二次流通手段ということができよう。もとより、預金通貨が信用通貨としての形態にあることは、自明である。それは、さきにも述べたように、流通する銀行債務であるからだ。銀行の預金取引上の債務が、銀行券に代わり、その価値でもって、流通手段の機能をいとなむ[1]。

注（1）拙著『再生産と信用』（昭和三二年、有斐閣）、第五篇第二章「貨幣流通の組織的構造」、とくにその第三節（A）「預金貨幣」（C）「現金の意味」を参照。

こうして、通貨といえば、銀行券と預金通貨とを問題としてゆけばよいことになってくる。しかも銀行券と預金通貨とのあいだには、既述のような内面的に構造上の関係がある。預金通貨にとっての支払手段が、銀行券であった。銀行券の価値でもって、預金通貨は流通する。というのも、預金通貨は最終的には銀行券でもって支払われる預金債務であるところに、預金通貨の内実があるからだ。流通する預金債務、すなわち預金通貨は、それにとっての支払手段である

銀行券に代わり、その価値でもって流通手段としての機能をいとなむ。こうして預金通貨の価値は、それにとっての支払手段である銀行券の価値が決める。もしも支払われる銀行券が兌換銀行券であれば、預金通貨は兌換銀行券に代わり、その価値でもって流通する。しかしいまでは、不換の銀行券が預金通貨にとっての支払手段基礎となるにいたった。とすれば、こんにちの預金通貨は、不換銀行券を代表し、その価値でもって、その身代わりに流通に機能しなければならない。預金通貨の内実が、金にはもはや兌換されない不換の銀行券に変わってしまったということに、実は、こんにちの貨幣問題の難しさが潜む。ここからさまざまの新しくて錯綜した現象や問題が起こってきているのである以上は、注意を向けないわけにはゆかない。

もとより、その内実が不換銀行券化したとはいっても、やはり信用通貨としての形態を預金通貨が元のまま身につけていることは事実である。流通するものが、あくまでも銀行の預金債務であるという事実にいたっては、少しも変わってはいないのである。要求払いの銀行債務を内実とする第二次派生の流通手段であるという点では、まさにそれは信用通貨であり、信用通貨に特有の形態や構造を備えている。しかし、銀行債務が支払われるための支払手段基礎は、現在では、兌換銀行券から不換銀行券へとその内実を大変換させた。不換の銀行券でもって支払われる銀行預金債務、そういう内実の信用通貨。つまりこんにちの預金債務は、その内実を不換銀行券へと変えている。このことは当然に、こんにちの預金通貨の性格や機能ばかりではなしに、それと銀行券とのあいだの関係、および銀行券自身の性格や機能に重大な変化をもたらさずにはいないであろう。このことを考えてみないわけにはゆかない。

預金通貨の価値は、右に述べたところからいえば、これにたいし支払われる銀行券の価値によって規律される。このことは、信用通貨である預金通貨に特有の信用構造からくる基本的で本質的な規定であり、またそこからの当然で直接

的な帰結であった。支払約束の当体が兌換銀行券であるなら、この兌換銀行券の価値により、もしもそれが不換銀行券であれば、不換銀行券の価値に従う。かくて問題はおのずから、預金通貨にとっての支払手段である銀行券の価値の問題に移ってこよう。預金通貨の価値を定めるという銀行券の価値は、どのような仕方で、どのような大いさに定まるのか、という問題に。さて兌換銀行券の場合であれば、それは信用通貨であるから、その券面において支払うことが約束される金量の価値によって定まる。直接的に明示的に一定金量を要求ありしだい支払うことを公的に約束する兌換銀行券は、みずからの価値をみずからが規律する約束でもって、みずからが定める。自律である。自律的に自己の表わすべき金量＝価値を定めようとする手続きや原理は、兌換銀行券という信用通貨に固有の規定であって、それ自身のうちに宿されており、しかもそれは現実の兌換実行ということを通じて確証をうける。ところが不換の銀行券の場合には、そういう現実的保証がないのであった。自律的に自己の表わすべき金量＝価値を定めるという信用通貨に特有の本質的機構を欠くのである。そのうちに含まれている関係は、もはや銀行債務ではなくなっている。それは信用通貨ではない。直接的に自身の内部機構や関係からは、代表金量＝価値は決まってこない。不換の政府紙幣にも似て、外部で定まる流通必要金量から、外から内へと、投射をうける。外部の事情が、内部の価値を定めるにあたっての基準となる。関係は逆である。その際、流通必要金量のどれほどのものが不換銀行券の称呼の上に移されて現実にそれが章表する金量＝価値になるかは、このときに機能している銀行券の総額およびその流通速度のごときに依存する。

ところでこんにちの預金通貨は、最終的には不換銀行券でもって支払われるそれに変わってきた。したがって預金通貨は、右のようにして与えられる不換銀行券の価値をもって自身の価値とせざるをえない。論理の筋道からすれば、こういうことになってきそうである。しかし困ったことに、こんにちにおいては、それに背反するがごとき事実に当面す

る。通貨体系においてもつ銀行券の質的規定、それにおいて占める構造上の地位を別とすれば、その量的に機能上の働きにおいて、銀行券はもはや預金通貨により圧倒されてしまっているからだ。それはさきにも一言しておいたとおりである。

こんにちの発達した国々における流通では、銀行券は実際には、第一位の支配的流通手段の座からはすでに滑り落ちている。その働く領域といえば、わずかに所得の流通、しかも限られた小口の取引、または預金取引の便に恵まれぬ辺地か、あるいは手形決済などの僅かの部分においてのことにすぎぬ。総流通において占める金額のうえでの比率でみれば、預金通貨のすでに圧倒的に巨大なのに比べ、いまは、いうべきほどのものではない。そこでもしも、銀行券が流通するわずかな機能分野と、そこにおいての流通必要金量を前提として、そこで働く銀行券の分量やその機能度のごとき関係を媒介にして、銀行券が流通手段機能をいとなむにあたり表わす金量＝価値を想定し、これを現実には量的にも機能的にも支配的で圧倒的な流通手段＝預金通貨のがわに移し、そうして預金通貨の価値が定まると、このようにもしも推論が行なわれるならば、それはいかにも現実離れして、観念的で、なにか空々しいものに感じられよう。アメリカの流通において、資本の流通も所得の流通も、その大半は預金通貨により媒介され、預金通貨でする取引分野においての流通必要金量の方が、むしろ流通全体の状況を現実には、より妥当に反映し代表するものと、みなされてよい。わが国においても、そういう方向のものとみることができる。とすれば、このように圧倒的に支配的な預金通貨でもって行なわれる取引分野においての流通必要金量の方から実は、そこで機能する預金通貨の章表金量＝価値へと、じかに直接的に、作用が及んでこないとはいえまい。こんにちの預金通貨の内実は不換銀行券であった。不換銀行券化している預金通貨、すなわち金には換わらない不換の預金通貨の総額と機能度とが、そこでの流通必要金量と関係しあい、そのこと

により定まるある大いさの金量が預金通貨の単位呼称の章表する金量、したがってその価値となって預金通貨に帰属しないわけのものではあるまい。

銀行券の流通を現実には圧倒してしまうほどに社会に普及するようになった預金通貨の働きということ、もう一つは、預金通貨の内実が不換銀行券化した、すなわち不換化したということ、こういう新しく生じた二つの現実的事態が、銀行券と預金通貨とのあいだに存在していたこれまでの関係に、修正と変化とをもたらすことになったと考えられよう。預金通貨が流通する取引分野においての流通必要金量が前提となり制約となり、預金通貨の総額がどのように増そうと、機能度がどのようであろうと、総体としては流通必要金量を越える大いさの価値を、それは章表して流通することはできない。こうして自然と、預金通貨の単位呼称が章表しうる金の分量＝価値が定まる。預金通貨は、この価値を代表して、社会の総流通の圧倒的部分の流通を媒介する。必ずしもそれは、不換銀行券の価値によっては規律されない。不換銀行券の方は、またそれで、社会においての少ない比率の流通の分野で、そこでの流通必要金量により限定され、この限定された金量をその総額でもって章表して、機能する。不換銀行券の単位呼称という観点からいえば、それが流通する取引分野においての流通必要金量を前提とし制約とし、流通する不換銀行券の総額と流通速度などの関係を介し、章表すべき金量＝価値は与えられる。と、いうことをいえば、ここに矛盾が生じてくることになろう。

一方では、右のようにして不換銀行券の価値が定まり、また他方では、それとは独立に、預金通貨の価値が定まるということだ。二種の通貨が二様に価値をもち、一国の通貨には二様の価値が与えられるということになってくる。しかもこの二つは、必ずしも同一でありうるとは限らない。預金通貨の総額や流通速度を定め、また預金通貨が機能する領域においての流通必要金量を定める諸事情は、銀行券の総額や機能の事情、およびそれが機能する狭少となってしまった

分野での流通必要金量を定める諸事情と、決して同じではないからだ。国民的流通には二種の通貨があり、二様に働き、したがって二様の章表金量＝価値を、それぞれの通貨が、それぞれの仕方で表わしつつ機能するという推論の帰結に導かれてこよう。これを裏返しにいって、それぞれの通貨が機能するそれぞれの流通分野においての物価高騰の一般的程度は、それぞれ異なってくるということに、なってこよう。二分野において二様にインフレーションが生じ、不換通貨は二様に価値をもつという推論である。しかしこれは矛盾である。同じ国において流通する二種の国民的通貨が、二様の章表金量＝価値をもつことがあってはならない。国民的流通には、二様の名目的物価水準の高騰＝インフレーションがあることはできない。一つの全体であるべき一国の総再生産過程・総流通過程が、これを禁じる。すなわち矛盾は解決されねばならない。

## 三　矛盾の解決―通貨構造と物価構造

矛盾は、まず第一には、つぎのような仕方で解決されうるはずである。すなわち、二つの通貨のあいだに存在する構造上の規制・法則を通じて。

すでに述べておいたように、銀行券こそが預金通貨にとっての支払手段基礎であった。預金通貨は、不換とはなっても、やはり形態上の規定としては、信用通貨としての姿をとる。そこには、それに特有な信用構造が内包されている。預金通貨は流通する預金債務であり、債務は清算され、決済されねばならないが、この決済を行なうものとして銀行券が基礎にある。銀行券でもって支払われる預金債務が流通手段となって機能するのを、預金通貨というのである。したがって預金通貨は、それにとっては支払手段基礎である銀行券から価値をうけとられる。預金通貨の価値は、銀行券

のそれと同じにならなければならない。同じでないときには、同じにせしめられる。同じにせしめられるように、預金通貨に内在するそれに特有な信用構造・規定・規制力が働く。銀行券の価値から流通する預金債務＝預金通貨の価値へと、それは一つの法則として貫く。そうなることを強要する。そうならしめる過程が続く。銀行券も預金通貨も、ともに同じ国民的通貨であり、預金通貨の一ドルや一円が銀行券の一ドルや一円と異なる価値をいつまでも持ちつづけておれるわけのものでは、あるまい。預金通貨に特有の信用構造に由来する本来の規制力にもとづいて、預金通貨の価値はその支払手段基礎である銀行券の価値へと、引きつけられざるをえないであろう。その銀行券というのは、いまは不換化されたそれである。こんにちの預金通貨の内実は、不換化された銀行券に転化されている。それは潜在化した不換銀行券とみることができよう。そういう内実にまで変わったこんにちの預金通貨の価値が、不換銀行券の価値によって規律されざるをえないのは、当然といえよう。

にもかかわらず、やはり預金通貨の価値がそれにとっての支払手段基礎である不換銀行券とは独立に決定されうるようになってきているという事実が、ここに注意されねばならない。それは、預金通貨の内実がいまでは不換化された銀行券に変わり、それ自身が潜在化した不換銀行券になっているという右におけると同じ事実にもとづく。預金通貨は、それが社会的流通の大半を支配すれば支配するほどに、銀行券からは独立に、それが機能する取引分野においての流通必要金量から、その章表すべき金量をうけとらされる。といって、流通必要金量から章表すべき金量を分かち与えられる預金通貨においての関係や仕方は、すでに狭い取引分野にまで追いこまれるようになった不換銀行券におけるそれと、根本の点では変らない。通貨の総額や機能度や、またそれらと流通必要金量とのあいだの関係から、不換化された銀行通貨の章表すべき金量の大いさは、預金通貨においても銀行券においても、同じように与えられる。ところが預金

通貨は、すでに社会の流通総額の大半を制し機能するまでに発達してきた。そのような預金通貨においての価値が、いまでは社会的流通の一狭少部面に追いこまれて流通している不換銀行券の価値に、その力を及ぼさないということはないであろう。

不換銀行券の価値は、それが支払手段基礎となって働く預金通貨の価値のうえに信用構造上の規制力を及ぼすが、一方、現実の問題としては、量的に圧倒的優位に立つ預金通貨の価値も不換銀行券の価値に力を及ぼす。二者は作用しあう。均衡化の過程が生じることになるであろう。とすれば、二つの通貨の二つの価値を均衡化せしめる要因や過程とは、なんであろうか。と考えてみて、われわれは物価の構造の問題につきあたる。

この点を明らかにするために、わが国のようになお所得の流通の多くの部分が銀行券でもって行なわれるような場合を、例にとってみることにしよう。そこでは資本の流通がおもに預金通貨でもって行なわれるのにたいし、所得の流通はおもに銀行券でもっていとなまれる。ところで銀行券でする所得の支出は、消費用の物資やサービスのごときに向けられるが、そこにはそこでの流通必要金量というものがあるはずだ。これに対するのは、そこで流通手段の機能をいとなむ不換銀行券の数量とその流通速度などの条件である。いまもし、二つの時点を比較してみて、のちの時点においての銀行券の総額の方が流通必要金量との対比において過大になっているとする。その単位呼称が章表する金の分量は減少しているわけである。一般商品や金の価値に変化がないとすれば、諸商品の価格は名目的に高騰しているのであって、消費者物価や小売物価の一般的上昇という顕現をとる。一方、資本の流通における必要金量との対比において預金通貨の総額が過大になっているときには、預金通貨の単位呼称が表わす金量は、不換銀行券におけるとまさに同様に、減少しているわけであって、このときには、卸売物価の名目的一般的高騰という現象をとるであろう。

さて、卸売物価の一般的名目的高騰が消費者物価や小売物価などにおいての一般的名目的高騰の度と全く同じでなければならぬという必然性のないことは、すでに述べたところから明らかである。これをいいかえれば、預金通貨が卸売物価の名目的一般的高騰という発現のうちにとるようになるその章表金量においての減少の度合いは、不換銀行券が消費者物価や小売物価などの名目的一般的高騰という発現において受けとらされるその章表金量の減少の度合いと、必ずしも一致しなければならぬと、いうことではない。このようにして生じうる二つの金量のあいだの不一致は、さきにも述べたように、一方では、預金通貨にとっての支払手段基礎である銀行券が、下方から上方へと、信用構造の脈絡・論理・法則をたどり、その価値を貫くという仕方で、訂正されうる。これを具体的にいうと、もしも預金通貨の章表金量が銀行券のそれよりも少ない結果となるときには、すなわち卸売物価の上昇の度合いが消費者物価や小売物価の上昇の度合いよりも高いようなときには、より大なる章表金量の銀行券により支えられたより少ない章表金量の預金通貨は、より大なる金量を信用構造上は表わすのであるから、より大なる金量を求めての預金通貨から銀行券への変換が生じるであろう。預金通貨が現金化され、現金化されての銀行券が所得の支出に投ぜられるであろう。卸売物価の上昇は抑制され、消費者物価や小売物価が上昇し、かくて二つの通貨の章表する金量が合一するにおいてやむであろう。

こんどは、卸売物価の上昇の度合いが消費者物価や小売物価のそれよりも低い場合についてみる。卸売物価の低い上昇率のうちに宿されている預金通貨の章表するより大なる金量からは、銀行券を預金に変換させての支出が結果しよう。銀行券による所得の支出は減少し、預金通貨による資本への投下が増大する。消費者物価や小売物価の方は抑制されるが、卸売物価の方は高騰し、二種の通貨の章表金量が合一するにいたるまで、この過程は続く。とはいえ、このように述べてきた以上二つの場合についての推論は、実のところ、信用通貨における構造法則が物価構造のうえに投影されて

働く経緯と媒介の過程についての論述でしかない。現実には、信用通貨構造の作用力よりも、物価構造に内在する作用力・法則性の方が、実はもっとじかに直截に、物価水準においての二方面性、通貨価値においての二部分性の克服と均衡化に作用するものであることが、注目されるべきである。

銀行券が預金通貨にとっての支払手段基礎＝信用構造上の根基であるとすれば、したがって銀行券の価値が預金通貨のそれを信用構造上規定するとすれば、やや似たような関係において、卸売物価が消費者物価や小売物価を規制する。前者は後者にとっては、原価構成要因となるからだ。卸売物価が高騰してゆくようなときには、小売物価や消費者物価も高騰しないわけにはゆかない。もちろん後者の高騰が前者の高騰に作用しないと、いうのではない。賃金水準の高騰のごときをとおして、生産用諸資材の価格は高まるであろう。しかも生産用諸資材の高騰は、またはね返って、消費者物価の高騰を導くであろう。けれども、このようにして消費者物価や小売物価が卸売物価に及ぼす作用よりも、卸売物価が前二者に及ぼす力の方が、実は直截で、早い。卸売物価が高騰するような状況のもとでは、それを原価構成要因としてもつ小売物価や消費者物価は、これを反映して高騰せざるをえないのである。

もっとも卸売物価が高騰したからといって、すぐさまそこで働く預金通貨の章表金量が減少したなどと結論するのは軽率であって、市場における需給の一時の変動にもとづいても卸売物価は高騰しうるし、また景気的に周期的にそれが変動する場合もあるからだ。しかしそれはそれとしておいて、ともかくもある時点をとってみて、そこでの預金通貨の章表金量が銀行券のそれよりも少ないとしよう。いいかえると、卸売物価の名目的一般的上昇の率が小売物価などのそれよりも高いとしよう。そのようなときには、卸売物価のより高い名目的一般的上昇率は、遠からぬ時間に、小売物価などの名目的一般的上昇率のうえに作用を及ぼしてゆくのである。もしもそのとき、このようにして高められる小売物

価などの名目的一般的上昇が限定された有効需要という障壁につきあたる場合は、高められた卸売物価水準にたいしての下降圧力となって反対作用が及ぶであろう。しかし独占資本主義のこんにちの事情のもとでは、卸売物価水準のうえに加わる押し下げへと向かうこのような反対圧力にたいし、それを拒む要因が体制上用意されているのであって、独占資本主義に特有な蓄積様式は、卸売物価水準の下降の代わりに小売物価や消費者物価水準を高める付加的有効需要政策をとろうとするのが、常例である。財政上赤字の不生産的支出や消費者信用の拡大などの政策がそれである。しかしそれはともかくとして、このようにして物価体系に特有の構成や過程にもとづき、小売物価などの名目的一般的上昇が卸売物価水準のそれに合一し、そうして預金通貨の章表金量と銀行券のそれとの一致が回復されうる。

卸売物価の名目的一般的上昇が小売物価などのそれよりも低い場合には、いいかえて預金通貨の章表金量が銀行券の章表金量よりも大きい場合には、つぎのような合一への過程が生じるであろう。すなわち、低い卸売物価を原価構成要因とする小売物価などにおいて価格の上昇率が高い場合は、後者においての利潤部分が増す。増大する利潤はこの部面への資本の流入を招き、小売物価においては低落し、卸売物価においては高騰するという反作用が起こってくるであろう。そうして二部面においての物価の名目的一般的上昇率は均衡化され、二種類の不換銀行通貨が章表する金量の合一が果される。独占資本主義段階においては、卸売物価が需要の増大にたいして価格の上昇でもって反応する速度は割りに早い。一方、有効需要という障壁につきあたり、上昇的価格の運動が阻止されやすいという点では、小売物価などの方が早い。しかしそれはそれとしておいて、さまざまの物価のさまざまの分野においてのさまざまの運動とその均衡化を通じて、すなわち物価の形成と構成という物価体系とその運動に内在する諸法則にもとづき、二通貨の章表金量が均衡化せしめられること、以上のごとくであった。卸売物価や小売物価などのごとき物価の構造諸因子と、それぞれのあ

いだに存在して働く内面的機能連関とが、それぞれに分かれて流通する預金通貨と銀行券とにおけるそれぞれの価値を合一へと向わしめる働きをするのである。

## 四　矛盾の発展—現代インフレーション

しかしそれにしても、ここに注意されねばならぬ一事がある。それはさきにも触れておいたことだが、卸売物価が小売物価や消費者物価にたいし及ぼす規制力は、資本主義の発展とともに、ますます増大するのであった。設備投資が増し、生産手段生産部門の拡大が進み、生産がますます迂回化されて行なわれる時代になると、資本の流通が全流通において占める割合は、所得の流通のそれをますます引き離して、圧倒する。設備投資が巨大化し、株式会社企業が発展し、資本の集中と集積がとくに生産手段生産部門において進むこんにちにおいては、独占的巨大企業が根を下ろし、それがおしつける独占価格は物価体系においての中軸となり、それを指令し強制し、物価の構造や展開や動きは産業資本主義の段階におけるそれとは異なったものを示すようになってきた。

一例をあげれば、生産手段生産部門において設定される独占価格が、小売物価や消費者物価が決まるにあたっての強い規制要因となって働く。景気上昇の波に乗って、独占的価格は生産用諸資材を中心に敏感に引き上げられる。こうして独占的価格を多く含む卸売物価の上昇の度は早い。しかしいったん不況に転じても、卸売物価は強い下方硬直性を示すのである。独占・寡占の生産部面において、物価下落への強い抵抗がなされるからである。こういうおもに生産手段生産部門にかかわる物価の貨幣実現には、こんにちではもっぱら預金通貨が働く。生産手段生産部門の総国民生産においての比重が大いに高まる二〇世紀になって、預金通貨の総流通において占める比率もまた大いに増大するが、やがて

不換の時代が到来し、預金通貨の内実もまた不換銀行券化するにともない、好景気時には敏感に引き上げられても不況時には下落することを拒む卸売物価の傾向的には高まりゆく上昇運動を支援する貨幣制度上の手段として、預金通貨は独占資本主義の再生産・蓄積過程によって、そのために利用し動員されるようになる。この分野の流通に必要とされる金量と対比するときには、増大しゆく預金通貨の額が導入され、預金通貨の単位呼称が章表する金量はしだいに減少してゆくことになってきた。

銀行券の場合は、どのようになるか。独占部面においての蓄積の増大から、賃金所得のそれまでの流れに加えての銀行券の追加支出が生じよう。それは消費需要の増大をもたらす。供給がこれにともなわぬ場合には、小売物価や消費者物価の高騰を導く。その高騰率が卸売物価の高騰のそれに及ばぬときは、消費手段生産部門においての採算が悪くなるから、消費手段の需要を充すに足るだけの供給は行なわれえない。こうして小売物価や消費者物価はさらに上昇し、これをすでに上昇している高い水準の卸売物価が支え、また押し上げてゆく。独占的諸価格を内部に含む資本の流通においての諸物価の上昇、すなわち卸売物価の高騰は、それにつれての小売物価や消費者物価の高騰を促す推進的力となって働く。賃金水準もまたこれにつれて上昇してゆくであろうが、労働組合の発達し強くなった現代の資本主義では、いったん手中に収めた賃金水準の不況時に変わってからの引下げは、労働組合としてはなかなか応じることを承知しない。こうして好況時において達した銀行券でする賃金所得の高い名目的支出の水準は、不況時になってもあまり減らず、維持されうる。消費手段の供給が増してきて、その価格が下落に向かうことはありうるが、卸売物価の方は独占・寡占の力によって、あまり下らぬ。もしも消費者物価だけ下って、卸売物価が下らぬときには、消費手段生産部門においての採算は急に悪化するであろうから、その供給は減少に向かい、しかも消費支出の大いさはそれほど減少しないの

であるから、消費者物価の下落は支えられうる。こうして不況になっても、卸売物価が下らぬままに、小売物価や消費者物価は高い従前の水準とあまり変らぬところで維持されうる。この部面で機能する不換銀行券の章表金量は、以前に比べて、より少ない量しか表わしはしないわけである。

不換銀行券がこのとき章表する金量を減少せしめるようにした原因なり機因としては、いくつかのことが挙げられよう。第一には、景気変動という過程がある。また独占という働きがある。賃金水準の低下を拒む労働者がわの抵抗力ということが挙げられうる。しかしここでは、独占価格が支配する資本の流通においての物価の運動が、自由価格がなお風靡する所得の流通においての物価の運動へと作用を及ぼし、それを貫き、制約し規定しているという事実に、とくに注意を加えたい。卸売物価の運動が小売物価や消費者物価の運動を規制するのである。預金通貨においての章表金量が、銀行券においての章表金量に作用を及ぼす。通貨構造において銀行券の価値が預金通貨のそれに及ぼす働きとは、まさに反対のことになっている。このような反対の関係が生じ、反対の作用が行なわれるのも、まさに現代資本主義における特色といえよう。しかも同時に、それは現代に特有の矛盾を表わす。景気循環を繰り返すごとに、卸売物価の水準がしだいにその水位を高めてゆくのが、現代資本主義においては常例となった。これに導かれ、支援され、支えられて、消費者物価の水準もまた、しだいに高まってゆく。

景気循環のたびごとに労働生産力は向上し、それは確かに物価を押し下げる働きをなしつづけているであろうのに、物価は全般的に上昇への傾向を止めようとはしない。金の価値にはそれほどの変動はないはずであるから、流通手段として働く現代不換銀行通貨の章表する金量は、傾向としては、しだいに減少へと向かっているわけだ。一般物価水準においての名目的高騰となり、すなわちインフレーションにほかならぬ。インフレーションは現代資本主義の再生産過程

の奥底に深く結びつき、住みこみ、それとは分かちがたくなってきたかに思われる。そういうインフレーションを発現せしめる道筋・契機・過程・媒介として、二種の銀行通貨の二様の価値の均衡化が、ここに介入して働いているかにみえるのである。卸売物価の高騰のうちに内包される預金通貨の章表金量の減少を支えとし推進力として、小売物価や消費者物価の水準がもはやあとには引けないで、しだいに高まってゆき、まさにそのことに含まれている不換銀行券の章表金量の減少が、それとともに生じ、すなわち二種の銀行通貨の二様に分離しうる価値の合一への過程が行なわれるのであるが、しかもそういう過程それ自身がまた、インフレーションへの傾向を内に含む現代資本主義の再生産・蓄積過程ということでしかないのであった。そういった過程の結果として、ドル危機が生じ、金流出となったことについては、前号の論文において、すでに述べた。現代資本主義再生産・蓄積過程の矛盾をいい表わす徴表・特質というべきであろう。一つの矛盾を克服するための一つの克服過程それ自身がまた、実は新しい矛盾の種をまき、それを生み出す。矛盾の発展であり、展開である。

## 五　おわりに

こんにち、通貨やその価値などが論ぜられている様子をみると、普通には、なんの格別の反省もなしに、銀行券だけをもって通貨の全体を代表させて考察するという仕方が、通例のようだ。通貨の主流は銀行券であり、銀行券の量および機能度のいかんを考察すれば、インフレやデフレのごときを充分に解明しうるかに速断する。まことに単純で、あっさりした考察の仕方。しかし考えてみると、おかしなことである。銀行券だけが通貨ではない。むしろ銀行券の量を圧してこんにちの支配的な流通手段となって機能しているのは、預金通貨の方である。預金通貨の価値のがわからも、現

実には銀行券の価値へと作用が及ぶ。一般的物価の水準や一般的通貨の価値のごときに主たる規制力を及ぼすものといえば、銀行券ではなくて、預金通貨であるとさえいえるであろう。

卸売物価水準の変動に合体された預金通貨の章表金量の変動をとおして、小売物価や消費者物価などの変動に合体された不換銀行券の章表金量が変動せしめられ、そうして二通貨の二価値は均衡化され、総体としては、現代資本主義の蓄積過程の進行にともない、一般的に物価水準は高まり、一般的に不換銀行通貨の章表金量は減少してゆく。すなわちインフレーションという過程が進むのである。不換の預金通貨は、実に現代資本主義が生み出した独自なる所産であった。現時代の特質を、流通の面・通貨の面において代表する一つの顕著なる徴表でもあった。預金通貨への配慮を欠く通貨や通貨の価値についての考察は、こんにちの現実に及ばない。

そうはいっても、やはり、預金通貨のことを考えに入れた考察もあるわけだ。しかし概して、預金通貨も銀行券とならぶ銀行通貨の一種というくらいに軽くあつかう。すなわちそれらを並列せしめ、平面化してみてゆくという仕方であって、銀行券の価値についての既知の知識が、そのまま預金通貨の考察のうえへと移されてゆく。預金通貨の流通や価値規定についての独自なる特質や働きには目をふさぐ。ことに現代資本主義において行なう特殊に現時代的な役割や機能には注意を払わない。通貨の構成や関連、また物価の形成や構成・推移・変動などとの関連において、預金通貨の価値と銀行券の価値とのあいだの関係および二者の相互移行・規制のごときが考慮されない。預金通貨について述べられることはあっても、その実は、銀行券についての知識が預金通貨のところにまで単に引き伸ばされただけで、繰り返し語られているというにとどまる。本質は、通貨を一般に銀行券とみて論ずる単純な考察と変わりはない。

といって、不換銀行券についての考察が、ないがしろにされてよいと、いっているのではない。確かに、預金通貨はこ

んにちの支配的な流通手段であるとはいえ、やはり不換銀行券のために残されている僅かではあるが固有の流通分野はあり、この分野において不換銀行券がどのように働き、またその価値がどのような筋道をとおり、どのような大いさに定まるかは、この分野における流通必要金量の問題とあわせて検討されねばならぬ重要論題の一つであろう。こうして定まる銀行券の価値が、預金通貨のがわへと信用通貨構造の関係をとおして移されてゆくという信用通貨に固有で本質的な法則・規制の力が、いまも働き、貫いていることは、看過することのできぬ事実である。それにもかかわらず他方では、預金通貨がそれに特有な流通分野で独自な仕方で独自に価値をうけとり、それがまた銀行券の価値へと移されてゆく。そういう逆作用、逆行の働きが、現代資本主義においては、むしろ強まってきた。それが、現代資本主義の過程を特色づける一つの重要な特色・要因ともなっているのである。預金通貨への考察を中軸に打ちすえて、現代不換銀行通貨の価値についての研究は、したがって現代に特有なインフレーション過程の研究は、なされねばならなくなっているのが、現状と思う。このことを注意もし、指摘もしたいと思ったのである。

（一九六八・四・一）